お札と切手の博物館ニュース

Banknote and Postage Stamp Museum News

Contents

展覧会追録	令和4年度冬の特集展『お札を彩るさまざまな模様』より「お札に変化をもたらした人々」
展覧会報告	令和5年度春の特集展『さくら咲く切手』
シリーズ	世界のお札と切手をたずねて⑤

2023/7/1
Vol. 52

令和４年度冬の特集展

お札を彩るさまざまな模様

令和４年度冬の特集展『お札を彩るさまざまな模様』より

お札に変化をもたらした人々

令和4年12月20日(火)から令和5年2月26日(日)まで、お札の模様をテーマにした展示を開催しました。

お札の模様といっても、肖像など大きく描かれているモチーフのほか、お札の紙面を額縁のように飾る唐草の枠模様、そして、背景を埋めるように隙間なく描かれた線や幾何学模様などからなる地模様というように様々なものがあります。

展示スペース入口（左）と展示風景（下）

本展では、これらのお札を構成する模様のうち、枠模様や地模様を中心に、日本のお札の歴史的な変遷を解説し、加えて海外の特徴ある模様を紹介しました。

お札のデザインを変更するきっかけとなるのは改刷（お札を仕様変更して新しく発行すること）ですが、ここでは、これまでの日本の改刷においてデザイン的に大きな変化があったものを取り上げ、その一役を担った人物について触れたいと思います。

改めてお札の模様の変遷を概括すると次の通りです。

江戸時代の日本古来の製法で作られたお札は、吉祥柄や七福神などの伝統的な模様があしらわれたもの(図1)でしたが、明治初期に製造技術の近代化が図られたことを機に、西欧のお札に見られるような肖像を主とする模様のほか枠模様や彩紋と呼ばれる幾何学模様、そして地模様（図2）がお札のデザインの基調となり、明治後期から大正時代にかけて発行されたお札には、当時流行した西欧のデザイン様式の影響を受けたと思われるものが見られます。

その後、昭和5(1930)年発行の日本銀行兌換券乙100円(4ページ図8、以下、乙100円)において肖像の聖徳太子に関連する模様が描かれたことで、日本古来の模様がお札に登場します。その模様は、昭和30年代

図1　恵比寿と宝尽くし柄を描いたお札
秋田藩札銀 50目
宝暦4(1754)年

までお札の図柄に用いられました。後に続くお札においては、肖像を始め、枠模様や幾何学模様を取り入れた明治期以来のデザイン要素を引き継ぎながらも、肖像の大型化や解放的な枠模様など時代の考え方に即した変容を見せています。

図2　新紙幣 金10円　明治5(1872)年
初めて地模様を採用

日本近代紙幣の父　キヨッソーネ

日本のお札の歴史において、最も大きな転換点は明治期の近代化です。前時代のお札の製造技術では、偽造を防止することができなくなったため、西欧からの先進技術の導入に際し、技術伝授のために日本に招へいされたのがイタリア人のキヨッソーネです。

キヨッソーネは、当時、お札の製造事業を開始することとなった紙幣寮(国立印刷局の前身)のお雇い外国人として、その職員に対し、自身の本業である原版彫刻の技術のほか、原版から大量生産するための正確な複製版を作る技術、そして、印刷技術に至るまで、製造技術全般についての知識を伝えました。また、キヨッソーネは西洋式のデザインも日本にもたらしました。

このように、日本のお札の近代化に多大な貢献をしたことから極めて重要な人物です。

キヨッソーネの在職中の明治14(1881)年から16年にかけて発行された改造紙幣のシリーズ(図3)において、日本のお札に初めて肖像が採用されました。肖像は、外国紙幣の例を参考に偽造防止効果が極めて高いことが採用の理由です。それにはキヨッソーネの助言があったといわれています。

図3　改造紙幣1円　明治14(1881)年
初めて肖像を採用

お札の欧化の立役者
田沢昌言、森本茂雄

田沢昌言(たざわ まさこと)は、キヨッソーネの退職後に初めて発行されたお札の英字デザインを担当した人物です。アメリカで技術を学んだ経歴から西洋のデザインを得意としていました(図4)。

田沢は、日本で初めて行われた切手デザインの公募に当選したことでも知られ、その切手は田沢切手(図5)と呼ばれました。

図4　日本銀行兌換券甲5円 裏
明治32(1899)年

図5　田沢切手
2銭 大正2(1913)年(左)
6銭 大正4(1915)年(右)

森本茂雄は、田沢昌言と同時代に活躍したお札の原版彫刻者です。森本も海外の動向に注意を払っており、海外の雑誌を元に西欧で流行しているデザイン様式の習作をいくつも遺しています。大正5(1916)年に発行されたお札の裏面（図6）では、森本が田沢とコンビを組んで唐草模様と英字をそれぞれ担当しました。森本の描いた唐草は、田沢がデザインした英字の曲線に沿うように配置した西洋式の唐草で、森本が習作で繰り返し練習した成果がそこに反映されています。

図6　日本銀行兌換券丙5円 裏
大正5(1916)年

世界の技術を日本のお札へ　矢野道也

田沢や森本のように直接製造に携わった者以外にもこの時代のお札の変化に関わった人物がいます。明治後期に写真技術を悪用した偽造が発生したことから、矢野道也はその対策を検討するために調査員として欧米へ派遣され、各国の製造技術を調査しました。その成果を踏まえ、明治43(1910)年に発行されたお札(図7)では、それまでの主な図柄を黒インキで印刷し、重厚感を表したものから、印刷で再現しづらい淡い色彩の重ね刷りへ変更し、さらに空欄に白黒すかしの大黒天の像をすき込んだものへと改良されることとなりました。

このお札のシリーズの発行後、昭和2(1927)年に兌換銀行券整理法が公布されたことに伴い、お札の改刷が行われることとなりました。新しいお札のシリーズは、日本のお札のなかでもデザインコンセプトのある珍しいもので、肖像と券面全体の模様に時代的関連性を持たせたデザインとなりました。矢島は、このお札のシリーズ最初となる乙100円(図8)の製造に際し、デザイン製作を担当した磯部忠一とともに初めてお札に採用された聖徳太子の肖像や法隆寺の模様を時には識者の指導を仰ぎながら、苦心の末完成させています。

図7　日本銀行兌換券乙5円
明治43(1910)年

（参考）日本のお札が参考としたドイツのお札
ドイツ 10マルク 1906年

図8　日本銀行兌換券乙100円
昭和5(1930)年

最初の聖徳太子のお札の生みの親　磯部忠一

磯部忠一（いそべただかず）は、乙100円以外に日本銀行兌換券乙5円などを手掛けた、大正から昭和初期を中心に活躍した図案製作者です。乙100円のデザイン下図は、関係各所の求めに応じ数回修正がなされたほか、肖像の描画においては東京帝室博物館や東京帝国大学教授からの意見により、さらに修正が重ねられました。

肖像に1年、最終的なデザイン完成に3年という月日を費やしましたが、磯部の尽力により日本古来の模様が散りばめられた、それまでのお札にはないデザインが生み出されました。　（学芸員　松村　記代子）

展覧会報告

令和5年度春の特集展
さくら咲く切手

令和5年4月4日（火）～5月7日（日）まで、春の特集展「さくら咲く切手」を開催しました。

当館は、さくらの名勝として知られる北区王子の飛鳥山（図1）近くにあります。本展は、その名勝とともに、博物館ならではの趣あるお花見を楽しんでいただこうと企画したものです（図2左）。

特に伝えたかったのは、150年もの間、日本切手の根幹である普通切手に、ほぼ欠かすことなく、さくらが登場し続けていることです。しかも、現在では、偽造防止技術としても「さくら」のモチーフが採用されています（図3）。また、印刷局では、さくらを題材とした名画やデザインを艶やかに、繊細な色遣いで再現する技術力があることも特記すべきポイントです。多種多様なさくらの可憐な表現、色の差異、背景とのコントラストの美しさは、一つとして同じ色のない特別に調合した色（特色）だからこそなせる技といえるでしょう（図4）。

今回は切手が主役でしたが、お楽しみコーナーとしてお札も取り上げました。歴代のお札に描かれたさくらをクイズ感覚で探す「再発見お札のさくら」は、想定以上に好評をいただきました。

多くの方のご来場ありがとうございました。

なお、本展の企画に合わせて、ホームページ上で展示の一部をご覧いただける特設ページ（図2右上）を設けています。会期終了後も当分の間、公開を続ける予定ですので、ぜひご覧ください。

（学芸員　土井　侑理子）

URL https://www.npb.go.jp/ja/museum/tenji/kako/r050404_sakura_midokoro.html

図1　飛鳥山　　山口肇　撮影

図2　（左）会場風景　（右上）特設ページ画像

図3　（左）現在販売されている普通切手
（右）同切手の角度を変えると左下に現れる「さくら」
切手の角度を変えて見ると、偽造防止のため、左下にパールインキで印刷されたさくらが浮かび上がる。なお、さくらとともに、右上には〒マークも同様に印刷されている。

図4
一つとして同じ色のないさくらの表現（部分拡大）
今回展示した切手の部分拡大図。それぞれ特別に調合した固有の色（インキ）を使って印刷しているため、多種多様な表現が可能となっている。

このコーナーでは、世界各国が発行するさまざまなお札や切手を取り上げ、各国のお国柄や文化、歴史などの情報をご紹介します。

世界のお札と切手をたずねて ⑤

●インドネシア

世界有数の火山地帯

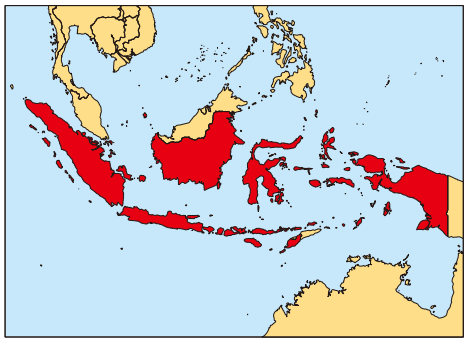


図1　アナク・クラカタウ島
（お札）100ルピア（裏）　1992年
（切手）110ルピア　1983年
1883年の大噴火は人類史上最大ともいわれる。当時、噴煙が70～80㎞に達し、全地球を覆ったため、以後5年間は太陽が異常な色で見えたほか、爆発による気圧波は地球を7周したという。津波は20mに達し、36,000人の犠牲者が出た。

図2　ケリムツ（クリムトゥ）湖
（お札）5000ルピア（裏）　1992年
（切手）40ルピア　1976年
3つの湖はターコイズブルー、オリーブグリーン、赤色（時により黒色に変色）をしており、それぞれ、若者の霊、老人の霊、罪人の霊が向かうと信じられている。

図4　セガラ・アナ湖
10000ルピア（裏）　1998年

世界最大の島国であるインドネシアは、地質、気候、民族、文化、動植物等々、どれをとっても多様であることが特徴です。

特に、130もの活火山をもつ世界的な火山地帯であり、地震などの自然災害が多いことでも知られています。一方で、噴火活動は、肥沃な土壌や湧き水など、住民の生活に恩恵も与えています。

この火山やカルデラ湖（噴火後の陥没部にできる湖）などは、国民が日々親しんでいるほか、世界有数の絶景、観光地でもあることから、インドネシアを代表する景観として、1990年代の同国のお札のデザインモチーフとなり、複数のお札に取り上げられています。これらのデザインには、度々見舞われる災害も含めた自然への畏怖が込められていると言えるかもしれません。

また、火山を描いて災害を周知し、被災者への寄付金を募る切手も多数発行されています。

図3　世界最大のカルデラ湖・トバ湖
（お札）1000ルピア　1992年
（切手）1ルピア　1961年

図5　火山噴火による被災者への寄付金を募る切手
（上段左）5+0.5ルピア　1967年
（上段右）メラピ火山噴火
75+25セン　1954年
（下段）アグン火山噴火
6+3ルピア　1963年

●インドネシア

救われた文化財

図6　ボロブドゥール寺院
（お札）10000ルピア（裏）1992年
（切手）3ルピア　1961年

図7　ボロブドゥール寺院のレリーフ
10000ルピア　1975年

インドネシアのお札には、宗教文化の歴史を表す遺跡も取り上げられています。それが、世界最大の仏教遺跡、ボロブドゥール寺院です（図6）。ジャワ島の密林深く、8〜9世紀ごろに建立されたこの寺院は、ピラミッド型の土台に6層の方形段、3層の円段、仏塔で構成された複雑な造りとなっており、これが天界、人界、地下界からなる宇宙を表しているとの説もあります。また、寺院の各所には504体の仏像が安置されているほか、壁面には、1,460面、5kmに及ぶ精巧なレリーフが施されています（図7）。

遺跡は、雨季と乾季、活火山の噴火や地震といった厳しい環境の中で劣化が進み、1900年代から国の内外で保護や修復のための活動が行われました。特に、ユネスコの呼びかけによって、遺跡修復のための国際キャンペーンの実施が決まり、1973年から10年にわたる資金提供や国際協力を得て、大規模な工事が実施されました。日本も工事のほか、周辺環境の整備等の技術協力を行って貢献しています。こうした事業の前後には、修復のための寄付金（額面の10%）が付加された切手（図8）、修復を記念した切手（図9）がそれぞれ発行され、文化財保護の取組をPRし、その重要性を訴えています。図7のお札もまた、修復工事の真っ只中に発行されたお札です。

1991年には、遺跡が「ボロブドゥール寺院遺跡群」としてユネスコの世界遺産に登録されました。図6のお札には、国を代表する歴史的建造物としてはもちろん、この世界遺産登録も意識して遺跡が取り上げられたと考えられます。

（学芸員　土井　侑理子）

図8　ボロブドゥール遺跡救済のための寄付金付き切手
2.5+0.25、7.5+0.75ルピア　1968年

図10　遺跡を描く日本切手
国際文通グリーティング
（日本インドネシア国交樹立50周年）
80円　平成20（2008）年

図9　遺跡の修復を記念した切手
100・150・250ルピア　1983年

2023年7月19日(水)～8月27日(日)

2024年度上期（4月～9月）に新しいお札が発行される予定ですが、お札が新しく生まれ変わることを改刷（かいさつ）といいます。

本展では、日本においてこれまで行われてきた改刷の例を通じて、改刷の目的について解説します。

20年ぶりの改刷を目前にお札に対する注目度が高まりつつあります。この機会にお札について改めて学んでみませんか。夏休みの自由研究のテーマとしても最適です。

体験イベント すかし入りはがきを作ろう

特別展の会期中、すかし入りのはがきを作る体験イベントを行います。
皆様のご参加をお待ちしております。

対　　象 ■ 小学生以上
期　　間 ■ 2023年7月19日（水）～8月27日（日）（休館日除く）
体験時間 ■ 10：00～12：00、13：00～16：20
所要時間 ■ 約10分

＊予約は受け付けておりません。また、混雑具合により、受付を早めに終了する場合があります。

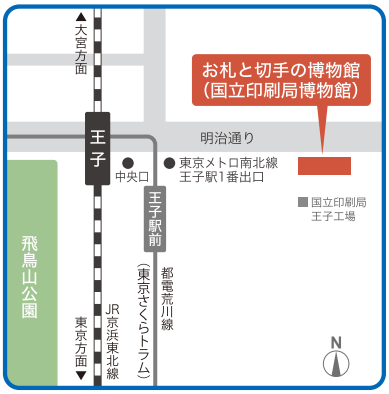
ご利用案内

入館無料
開館時間：9:30-17:00
休 館 日：月曜日（祝日の場合は翌平日）
年末年始、臨時休館日

交通
JR京浜東北線「王子駅」（中央口）下車　徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」（1番出口）下車　徒歩3分
都電荒川線（東京さくらトラム）「王子駅前」下車　徒歩3分
＊駐車場はありません。

常設展
偽造防止技術の歴史―印刷技術・製紙技術
偽造防止技術体験コーナー
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札/
切手の移り変わり/世界の切手/
国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/
お札の芸術
＊特別展開催時は一部展示の変更があります。

独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館
〒114-0002　東京都北区王子1-6-1
TEL.03-5390-5194
https://www.npb.go.jp/ja/museum/index.html
お札と切手の博物館　検索



発　行：お札と切手の博物館（国立印刷局博物館）
発行日：令和5年7月1日　©2023
本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。

※この冊子は再生紙を使用しています。